



新モンゴル高校との交流 (前編・5. 18～20)

生物科：関口伸一

5月18～22日、数学科の川崎先生、生物科の石塚先生と関口の3名で新モンゴル高校と親交を深め、互いの教育を学ぶため、モンゴルを訪れました。新モンゴル高校で生物の授業を見たり、お米について授業をしたり、生徒や先生たちと交流したりととても多くの事を学びました。今回はその一部を紹介します。

・新モンゴル高校とは？

新モンゴル高校は小・中・高の一貫教育を行っており、日本語教育に力を入れているモンゴル屈指の進学校です。日本の大学やアメリカの大学など、海外の大学へ多くの卒業生が学びに行っています。高校3年生では日本語で他教科の授業も行われていて、日本語がわかる生徒が多かったです。高校を5月で卒業して、6月には日本の文科省が実施する留学考査を受ける生徒が多く、日本での留学に向けて早いうちから日本語を勉強しているようです。

・新モンゴル高校の生物の授業見学

生徒が主体的に授業に参加していました。高校3年生の生物の授業を見学しました。まず、驚いたことは講義形式の授業ではなく、生徒が調べて、考え発表する授業が行われていたことです。内容は環境問題でした。あるグループはごみ問題を取り上げ、リサイクルについて自分たちが調べた内容をPowerPointでまとめて発表をしていました。また、中学3年生の授業では健康問題についてグループディスカッションをして、その問題点や対策について発表していました。日本でも急速に普及しているICT機器を用いてのアクティブラーニングがすでに普及していました。



発表の様子



グループディスカッションの様子

・新モンゴル高校での出張授業

生徒の学ぶ意欲の強さを感じました。今回、日本から来たということで、高校3年生の生物選択者に「お米の湿地適応」について授業をしました。まず、乾燥地帯であるモンゴルでは稲作はほとんど行われていないので、海城の生物部が行っている所沢市の北野の谷戸で行われている稲作について紹介しました。そのあと、湿地適応に関して根の低酸素に対する耐性として、根のスベリンの沈着、エチレン、オーキシンなど植物ホルモンによる根の分岐と成長の話など専門的な話をしても生徒は動じることなく、集中して授業を聞いていました。授業をしていて驚いたのは、「イネはC4植物ですか?」「田んぼでは排水などは問題になりませんか?」「モンゴルで稲作をするならどのようにすればよいですか?」などなど質問がとても活発に出てきたことです。モンゴルでは家に帰って親が学校のことを聞くときは「今日はどんな質問をして

きたの?」と言うそうです。質問は内容を理解していなければできないことです。日頃の声掛けに学びの本質があることを知りました。



出張授業の様子



高3生と校長先生と一緒に記念撮影

・モンゴルの自然

雄大な草原がモンゴルにはあります。今回、ウランバートルから車で1時間移動したところにあるテレルジの草原のツーリストゲルに1泊しました。(ゲルはモンゴルの木材と布でできた移動式の住居)。見渡す限りに広がる草原は一度見たら忘れられないくらい印象的です。山の一部に樹木が見られるのですが、南側斜面よりも北側斜面の方が樹木は多いです。日本の常識とは異なる自然の見方を学ぶことができます。こうした草原も開発や都市部を中心とした過放牧によって失われつつあります。広大な自然とその保全の意義について学ぶこともできます。

・新モンゴル高校と海城の交流へ向けて

「KAIGO」はモンゴルの若者に人気があります。今回、通訳をしてくれた高3の女子生徒に「なぜ、今回通訳をしてくれたの?」と尋ねたところ、理由の一つに「あのKAIGOの先生が来るから!」と話してくれました。その生徒の筆箱を見てみると「KAIGO」の文字とバスケットボールの絵がありました!モンゴルではバスケットボールが盛んで、日本のバスケアニメも人気があるようです。「海城にはアニメに出てくるようなイケメンな生徒はいますか?」と聞かれました(笑)。



通訳をしてくれた他の高校3年生に私から「TVとか見るの?」と聞いてみたところ、「僕は小さな村出身で、親が一生懸命働いてくれるおかげでこの高校に通わせてもらっています。自分がやるべきことは一生懸命勉強をすることです。だから、TVのことはわかりません」と話してしまいました。また、通訳をしてくれた卒業生の中にはモンゴル語はもちろんのこと、日本語、ロシア語、英語が喋れる方もいました。さらに、高校生の時に日本の映画をモンゴル語訳した方もいました。ちなみにその卒業生はこれからアメリカのUCLA(カリフォルニア大学ロサンゼルス校)に通うそうです。モンゴルの生徒たちのハングリー精神、学びに対する食欲とその自由さに圧倒されました。



これから日本の将来を担う海城生は、こうした勢いのあるアジアの優秀な頭脳、精神を持った人達が良きライバルとなります。若いうちに海外の同年年代の方々と交流をして、お互い切磋琢磨することは自らの学びや価値観形成に大きな影響を与えるでしょう。これから新モンゴル高校と海城の交流もさらに深まると嬉しく思います。その際は、ぜひとも積極的に関わってくださることを願っています。

(後編・5・21～24)

数学科主任 川崎真澄

§1. ウランバートルで和の心を見た

ここ新モンゴル高校は、学園長のガルバドラッハ博士が、日本の進学校をモデルに設立されま

した。昨年、初めて同校を訪問した際、高校で日本語が必修と聞いてはいましたが、中学のクラス新聞もがすべて日本語で書かれていたことに驚かされました。

そして今回、「日本を理解する教育」はさらに進化を遂げていました。

一例を挙げると、廊下の壁のそこかしこに、芭蕉や漱石、大江といった日本の文学者の、生徒による研究や、伊東深木ばりの美人画を模した、生徒による版画などが見られたのです。

いわば、単なる日本語の習得のみならず、和の心を理解しようと努めるその姿に、言い様のない心の揺さぶりを感じさせられました。

§ 2. キャピタル東京はアジアの憧れ

今日の授業開催は、同校の「飛び級12年生」に対してのものと、昨年9月に開学した高専にて行いました。

その礼儀正しく、かつ貪欲な勉強ぶりの依って来たと何人かの生徒に尋ねたところ、「新モンゴルには勉強するために来ました。遊びに来たのではないのです。日本に、特に東京に留学したいです。日本への留学が私の夢を実現するのです」と熱く語ってくれました。

本校生のなかで、果たして何人が、東京がアジアのなかで、「憧れの都市」と見られていることを実感する人がいるのでしょうか。今後の私自身の教育活動を考えるよい契機となりました。

§ 3. 郷愁的ロシア最良？！

学校を離れ、ダウンタウンに足を伸ばしてみると、しばしば、次のような光景に出くわします。それは、今も残るソ連邦との友邦関係時代に建てられたアパート群に入る道の多くが狭いのです。

案内のテムーレンさん曰く、「それは、社会主義の時代は、自動車の私有が認められていなかったもので、車が入るような道は必要ない、とソ連が考えたことによります」とのこと(しかし、火事の際はどのようにしていたのでしょうか?)。

そんな、時代時代でモンゴルを翻弄したように思えるロシアへの印象を、何人かの老若男女に聞いてみると、一様に「やはり、ロシアは大国であり、そして仲間に思う」と言います。

中年以降の世代は、ロシア式の教育を受けた点がそう答える大きな要因のようで、また若い世代は、とりわけ「祖母」や「母」を大事にするモンゴルにあって、彼女らがロシア式教育を受けていれば自然、ロシア最良になるようです。

因みに、モンゴル国民が好きな国の第一位は日本です。日本国民として、これは大いに誇りたい事実です。

複数のモンゴル人が、「日ロともお互いを知らなさすぎます。その接着剤役を果たせるのはモンゴルをおいて他にはないと自負しています」と話してくれました。

そのことに大いに刺激を受けた私は、ウランバートルを拠点として、東京とモスクワがサテライトとなる教育事業を夢想したのでした。

§ 4. 祝祭ムードの卒業式

4日目は、同高校の卒業式へ、来賓として出席することからスタートしました。

この10月に創立15年目を迎える若い学園である新モンゴル高校。そしてその快進撃。その勢いは卒業式においても大いに感じることができます。

附属小学校の児童とのコラボレーションあり、歌(ここでも「旅立ちの歌」などの日本の歌が披露されます)あり、踊りあり(マイケルジャクソン!)、の文字通り祝祭ムードで、おおらかかつハートウォーミングなものでした。

特筆すべきは、ナランバヤル校長先生が、数多い生徒達それぞれに声をかけ、その生徒のあれ



これについて激励される光景です。「よくご記憶ですね」とお聞きすると、「いや、たまたまですよ」と謙遜されましたが、日々、努めて生徒のことを把握されようとなさっていることは、多くの先生方が目にしているところであり、意気に感じて努力する生徒や卒業生が多いこの学園の原動力の一端を見た思いがしてなりません。

§ 5. イーグルテレビのニュースショーに出演

卒業式参加を終えた私は、戦後、ソ連の捕虜として日本人が建築に従事したという市内のオペラハウス前に位置する民放テレビ局「イーグルテレビ」の人気番組である11時のニュースショーに、本校グローバル部員として、関口伸一先生と出演しました。

これは、昨日、急遽、ガルバドラッハ学園長からもたらされたお誘いで、同行された同校外交部のオトノ女史のアドバイスと、同スウリ女史の通訳のおかげで、無事終了しました。

メインキャスターからの質問は、海城と新モンゴルの出会いの契機、教育比較、そして交流の現状についてでした。

この出演が、両校友好の更なる一助となることを祈念しています。

§ 6. 現代モンゴルの数学の父、なお健在

この日の最後は、数学の英才教育学校として有名な「オロンログ学園」を、昨年に引き続き、表敬訪問しました。その卓越した数学の才と教育への熱意により、私が「モンゴル古典数学の父がミャンガットなら、現代数学の父はこの方」と思ってやまないバヤスガラン博士を理事長に戴くこの学園は創立13年。

昨年は、同博士が国際数学オリンピックのモンゴル国団長としてチームを導き、かつまたモンゴル国数学オリンピックの主催校として大活躍されました。

また、それらに花を添えるように、1983年にあるドイツ人数学者により発表されて以来の未解決問題を、同博士とオロンログ学園の数学スタッフが共同で解決されたとのこと。

「解決すべき数学の問題とは、シンプルで、なおかつ古典に源流をもち、普遍的な内容をもつものでなければならない」と説く同博士に大いに共鳴した私は、同博士と堅い握手を交わしました。

本校の生徒にも是非、現代モンゴル数学の父の熱意に触れて欲しいものです。

なお、オロンログ学園の校長先生は29歳。若人の力溢れるモンゴル国では、若くとも有為な人材は、積極的に重用する気風がいたる所で窺えました。

§ 7. 行くなら恐れるな。恐れるなら行くな

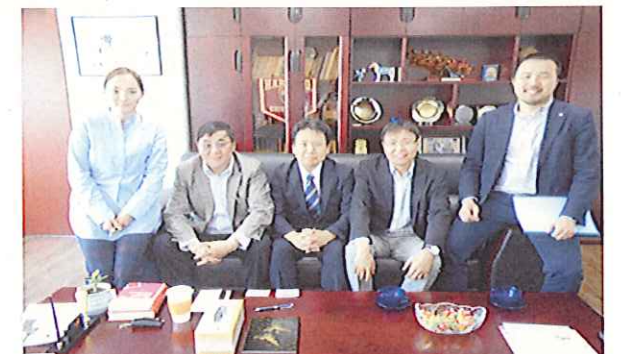
こうして4泊5日の滞在は、新モンゴル学園の皆様の格別の御配慮のおかげにて、まことに充実したものとなりました。

モンゴルでは「行くなら恐れるな。恐れるなら行くな」という格言があるそうです。

今後も、積極的に友好の拡大を目指したいと思います。



イーグルテレビのスタジオにて



左からスウリ女史、学園長、筆者、高校校長、高専校長